現代文B　学年末考査

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

隴西の李徴は博学才穎、天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃むところすこぶる厚く、①賤吏に甘んずるを潔しとしなかった。いくばくもなく官を a 退いた後は、故山、虢略に帰臥し、人と交わりを絶って、ひたすら詩作にふけった。下吏となって長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである。しかし、文名は容易に揚がらず、生活は日を追うて苦しくなる。李徴はようやく b 焦燥に駆られてきた。この頃からその容貌も峭刻となり、肉落ち骨秀で、眼光のみいたずらに炯々として、かつて②進士に登第した頃の豊頬の美少年の面影は、どこに求めようもない。数年の後、貧窮に堪えず、妻子の衣食のためについに③節を屈して、再び東へ c 赴き、④一地方官吏の職を奉ずることになった。一方、これは、己の詩業に半ば絶望したためでもある。かつての同輩は既にはるか高位に進み、彼が昔、鈍物として歯牙にもかけなかったその連中の下命を拝さねばならぬことが、d 往年の儁才李徴の ⑤ をいかに傷つけたかは、⑥想像に難くない。彼は快々として楽しまず、狂悖の性はいよいよ抑え難くなった。一年の後、公用で旅に出、汝水のほとりに宿った時、ついに発狂した。ある夜半、急に顔色を変えて寝床から起き上がると、何か訳の分からぬことを叫びつつそのまま下にとび下りて、闇の中へ駆け出した。彼は二度と戻ってこなかった。付近の山野を捜索しても、なんの手がかりもない。その後李徴がどうなったかを知る者は、誰もなかった。

問一　傍線 a ～ d の漢字の読み方をひらがなで答えなさい。

問二　傍線①とあるが、「賤吏」と表現されているのは、ここでは具体的に何という役職であるか、本文中から抜き出しなさい。

問三　傍線②「進士に登第した」と同じ意味で使われている部分を、本文中から七字で抜き出しなさい。

問四　傍線③「節を屈し」とあるが、

(1)「節を屈する」の意味を簡潔に書きなさい。

(2)ここでの「節」の意味として適当なものを、次の中から一つ選べ。

ア　役人としての能力を発揮し、出世して国家のためにつくすということ。

イ　国の役人であれば喜んで務めるが、地方役人にはならないということ。

ウ　つまらない上司に使われるより、詩人として認められる存在になること。

エ　家族とともに平穏な生活を送れるよう、官を退き詩作も諦めるということ。

問五　傍線④「一地方官吏の職を奉ずることになった」理由を二つ説明しなさい。

問六　空欄 ⑤ にあてはまる語句を、次から一つ選びなさい。

ア　羞恥心　イ　向上心　ウ　自尊心　エ　平常心

問七　傍線⑥「想像に難くない」の意味として適当なものを次のうちから選びなさい。

ア　安易に想像したくない。

イ　想像すべきでない。

ウ　想像するのが難しい。

エ　簡単に想像できる。

問八　ここまでの文章で「李徴」の性格についてどのように描かれているか。適当なものを次のうちから選びなさい。

ア　非常に優秀だが、小心者で他者と良い関係が作れなかった

イ　非常に優秀だが、詩作においてはまったく才能がなかった

ウ　優秀であったが、その才能をひけらかしてばかりいた

エ　優秀であったが、人と調和することがなくプライドが高かった

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

その人間の心で、虎としての己の残虐な行いのあとを見、己の運命を振り返る時が、最も情けなく、恐ろしく、憤ろしい。しかし、その、人間に還る数時間も、日を経るにしたがってしだいに短くなっていく。今までは、どうして虎などになったかと怪しんでいたのに、この間ひょいと気がついてみたら、俺はどうして以前、人間だったのかと考えていた。これは恐ろしいことだ。今少したてば、俺の中の人間の心は、獣としての習慣の中にすっかり埋もれて消えてしまうだろう。ちょうど、①古い宮殿の礎がしだいに土砂に埋没するように。そうすれば、しまいに俺は自分の過去を忘れ果て、一匹の虎として狂い回り、今日のように道で君と出会っても②故人と認めることなく、君を裂き食ろうてなんの悔いも感じないだろう。いったい、獣でも人間でも、もとは何かほかのものだったんだろう。初めはそれを覚えているが、しだいに忘れてしまい、初めから今の形のものだったと思い込んでいるのではないか？　いや、そんなことはどうでもいい。俺の中の人間の心がすっかり消えてしまえば、恐らく、③そのほうが、俺はしあわせになれるだろう。だのに、俺の中の人間は、④そのことを、このうえなく恐ろしく感じているのだ。ああ、全く、どんなに、恐ろしく、哀しく、切なく思っているだろう！　俺が人間だった記憶のなくなることを。この気持ちは誰にも分からない。誰にも分からない。俺と同じ身の上になった者でなければ。ところで、そうだ。俺がすっかり人間でなくなってしまう前に、⑤一つ頼んでおきたいことがある。

哀傷はじめ一行は、息をのんで、叢中の声の語る不思議に聞き入っていた。声は続けて言う。

ほかでもない。自分は a 元来詩人として名を成すつもりでいた。しかも、業いまだ成らざるに、この運命に立ち至った。かつて作るところの詩数百編、もとより、まだ世に行われておらぬ。遺稿の所在ももはや分からなくなっていよう。ところで、そのうち、今もな

お記誦せるものが数十ある。これを我がために伝録していただきたいのだ。なにも、これによって一人前の詩人面をしたいのではない。作の⑥巧拙は知らず、とにかく、⑦産を破り心を狂わせてまで自分が生涯それに執着したところのものを、一部なりとも後代に伝えないでは、死んでも死にきれないのだ。

袁傪は部下に命じ、筆を執って叢中の声にしたがって書きとらせた。李徴の声は叢の中から朗々と響いた。長短およそ三十編、格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の才の b ヒボンを思わせるものばかりである。しかし、袁傪は c 感嘆しながらも漠然と次のように感じていた。なるほど、作者の素質が第一流に属するものであることは疑いない。しかし、このままでは、第一流の作品となるのには、どこか（非常に微妙な点において）欠けるところがあるのではないか、と。

旧詩を吐き終わった李徴の声は、突然調子を変え、自らを嘲るがごとくに言った。

恥ずかしいことだが、今でも、こんなあさましい身と成り果てた今でも、俺は、俺の詩集が長安風流人士の机の上に置かれているさまを、夢に見ることがあるのだ。岩窟の中に横たわって見る夢にだよ。嗤ってくれ。詩人になりそこなって虎になった哀れな男を。

（袁傪は昔の青年李徴の自嘲癖を思い出しながら、哀しく聞いていた。）そうだ。お笑いぐさついでに、⑧今の思いを d ソクセキの詩に述べてみようか。この虎の中に、まだ、かつての李徴が生きているしるしに。

袁傪はまた下吏に命じてこれを書きとらせた。その詩に言う。

偶因狂疾成殊類　偶　狂疾に因りて　⑨殊類と成る
災患相仍不可逃　災患相仍つて　逃るべからず
今日爪牙誰敢敵　今日　爪牙　誰か敢へて敵せん
当時声跡共相高　当時　声跡　共に相高し
我為異物蓬茅下　⑩我は異物と為る　蓬茅の下
君已乗軺気勢 A　⑪君は已に軺に乗りて　気勢 A なり
此夕溪山対明月　此の夕べ　溪山　明月に対し
不成長嘯但成嗥　長嘯を成さずして　但だ嗥を成すのみ

問一　傍線 a～d のカタカナを漢字になおし、漢字は読み方を答えよ。

問二　傍線①「古い宮殿の礎がしだいに土砂に埋没するように」とあるが、(1)「古い宮殿の礎」(2)「土砂」はそれぞれ何を例えたものであるか。本文中から適語を抜き出せ。

問三　傍線②「故人」の意味として適切なものを次のうちから選べ。

ア　上級の役人　　イ　亡くなった人
ウ　古くからの友人　　エ　かつてのライバル

問四　傍線③「そのほうが、俺はしあわせになれるだろう」について、李徴の心情として適当なものを選べ。

ア　いっそ虎になった方が、誰よりも強くいられるだろう。
イ　人間としての苦悩から逃れられた方が、楽になれるだろう。
ウ　誰にも負けない権力を手に入れた方が、生きやすいだろう。
エ　しあわせの形とは人それぞれで、理解は難しいだろう。

問五　傍線④「そのこと」とはどんなことか、簡潔に答えよ。

問六　傍線⑤「一つ頼んでおきたいことがある」とあるが、李徴は袁傪に何をお願いしたか二〇字程度で答えよ。

問七　傍線⑥「巧拙」と同じ熟語の構成であるものを次のうちから選べ。

ア　降雪　　イ　不良　　ウ　新旧　　エ　最新

問八　傍線⑦「産を破り」の意味として適当なものを次のうちから選べ。

ア　人ではなくなり　　イ　財産を失い
ウ　妻子を苦しめ　　エ　志を曲げて

問九　傍線⑧「今の思い」として適当でないものを次のうちから選べ。

ア　虎となってしまったことからは、逃れることができない。
イ　昔は評判が高かったが、今は誰からも相手にされず孤独だ。
ウ　出世した君の姿が、恨めしくて仕方がない。
エ　月を見ても詩を詠むことはできず、吠えるだけで悲しさが募る。

問一〇　傍線⑨「殊類」と同じ意味の語を、漢詩中から抜き出せ。

問一一　傍線⑩「我」とは誰のことで、⑪「君」とは誰のことか。

問一二　漢詩中の空欄 A に当てはまる漢字として適当なものを次のうちから選べ。

ア　賢　　イ　冠　　ウ　恵　　エ　豪

三　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

時に、残月、光冷ややかに、白露は地にしげく、樹間を渡る冷風は既に暁の近きを告げていた。人々はもはや、事の奇異を忘れ、粛然として、この詩人の薄幸を嘆じた。李徴の声は再び続ける。

なぜこんな運命になったか分からぬと、先刻は言ったが、しかし、①考えようによれば、思いあたることが全然ないでもない。人間であった時、俺は努めて人との交わりを避けた。人々は俺を倨傲だ、尊大だと言った。実は、②それがほとんど羞恥心に近いものであることを、人々は知らなかった。もちろん、かつての郷党の鬼才といわれた自分に、自尊心がなかったとは言わない。しかし、それは臆病な自尊心とでもいうべきものであった。俺は詩によって名を成そうと思いながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交わって切磋琢磨に努めたりすることをしなかった。かといって、また、俺は俗物の間に伍することも潔しとしなかった。ともに、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心とのせいである。己の③珠にあらざることを惧れるがゆえに、あえて a コックして磨こうともせず、また、己の珠なるべきを半ば信ずるがゆえに、碌々として A に伍することもできなかった。俺はしだいに世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙恚とによってますます己の内なる臆病な自尊心を飼いふとらせる結果になった。

④人間は誰でも猛獣使いであり、その猛獣にあたるのが、各人の性情だという。俺の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。これが俺を b ソコない、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、俺の外形をかくのごとく、内心にふさわしいものに変えてしまったのだ。今思えば、全く、俺は、俺の持っていた僅かばかりの才能を空費してしまったわけだ。人生は何事をもなさぬにはあまりに長いが、

何事かをなすにはあまりに短いなどと口先ばかりの警句を弄しながら、事実は、才能の不足を暴露するかもしれないとの c 卑怯な危惧と、コックを⑤いとう d 怠惰とが俺の全てだったのだ。俺よりもはるかに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となった者がいくらでもいるのだ。虎と成り果てた今、俺はようやくそれに気がついた。それを思うと、俺は今も胸を灼かれるような悔いを感じる。俺にはもはや人間としての生活はできない。たとえ、今、俺が頭の中で、どんな優れた詩を作ったにしたところで、どういう手段で発表できよう。まして、俺の頭は日ごとに虎に近づいていく。どうすればいいのだ。俺の空費された過去は？　俺はたまらなくなる。そういう時、俺は、向こうの山の頂の巌に上り、空谷に向かってほえる。この胸を灼く悲しみを誰かに訴えたいのだ。俺は昨夕も、あそこで月に向かってほえた。誰かにこの苦しみが分かってもらえないかと。しかし、獣どもは俺の声を聞いて、ただ、懼れ、ひれ伏すばかり。山も木も月も露も、一匹の虎が怒り狂って、哮っているとしか考えない。天に躍り地に伏して嘆いても、誰一人俺の気持ちを分かってくれる者はない。ちょうど、人間だった頃、俺の傷つきやすい内心を誰も理解してくれなかったように。⑥俺の毛皮のぬれたのは、夜露のためばかりではない。

ようやくあたりの暗さが薄らいできた。木の間を伝って、どこからか、⑦暁角が哀しげに響き始めた。

もはや、別れを告げねばならぬ。酔わねばならぬ時が、（虎に還らねばならぬ時が）近づいたから、と、李徴の声が言った。だが、お別れする前にもう一つ頼みがある。それは我が妻子のことだ。彼らはまだ虢略にいる。もとより、俺の運命については知るはずがない。君が南から帰ったら、⑧俺は既に死んだと彼らに告げてもらえないだろうか。決して今日のことだけは明かさないでほしい。厚がましいお願いだが、彼らの孤弱を憐れんで、今後とも道途に飢凍することのないように計らっていただけるならば、自分にとって、恩幸、これに過ぎたるはない。

言い終わって、叢中から⑨慟哭の声が聞こえた。袁もまた涙をうかべ、喜んで李徴の意に添いたい旨を答えた。李徴の声はしかしたちまちまた先刻の［B］的な調子に戻って、言った。

本当は、⑩まず、このことのほうを先にお願いすべきだったのだ、俺が人間だったなら。飢え凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業のほうを気にかけているような男だから、こんな獣に身を堕とすのだ。

そうして、付け加えて言うことに、袁傪が嶺南からの帰途には決してこの道を通らないでほしい、その時には自分が酔っていて故人を認めずに襲いかかるかもしれないから。また、今別れてから、前方百歩の所にある、あの丘に上ったら、こちらを振り返って見てもらいたい。自分は今の姿をもう一度お目にかけよう。勇に誇ろうとしてではない。我が醜悪な姿を示して、もって、再びここを過ぎて自分に会おうとの気持ちを君に起こさせないためであると。

袁傪は叢に向かって、e 懇ろに別れの言葉を述べ、馬に上った。叢の中からは、また、堪えざるがごとき悲泣の声が漏れた。袁傪も幾度か叢を振り返りながら、涙のうちに出発した。

一行が丘の上についた時、彼らは、言われたとおりに振り返って、先ほどの林間の草地を眺めた。たちまち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼らは見た。虎は、⑪既に白く光を失った月を仰いで、二声三声咆哮したかと思うと、また、もとの叢に躍り入って、再びその姿を見なかった。

問一　傍線 a ～ e のカタカナは漢字に、漢字は読みをひらがなで答えよ。

問二　傍線①「考えようによれば、思いあたることが全然ないでもない」とあるが、李徴は自分が虎となった理由を、何によることだと分析しているか。それぞれ六字で、二つ抜き出せ。

問三　傍線②「それがほとんど羞恥心に近いものであることを、人々は知らなかった」とあるが、「それ」とはどういうことか、本文中の言葉を用いて一五字程度で説明しなさい。

問四　(1)傍線③「珠」は何を例えたものか答えよ。
(2)空欄［A］には「珠」と反対の意味で用いられる語が入る。最も適当なものを次のうちから選べ。
ア　月　イ　瓦　ウ　玉　エ　叢

問五　傍線④「人間は誰でも猛獣使いであり」とあるが、人間をどういう存在であると言っているのか。説明として最も適当なものを次のうちから選べ。
ア　自分の良くない性情をコントロールしながら生きる存在
イ　才能のために苦しみながら生きる存在
ウ　自分のうちに荒々しいものを持っている存在
エ　自分の内なる善と悪の折り合いをつけて生きる存在

問六　傍線⑤「いとう」の意味として正しいものを次のうちから選べ。
ア　さげすむ　イ　楽しむ　ウ　嫌がる　エ　愛する

問七　傍線⑥「俺の毛皮のぬれたのは、夜露のためばかりではない。」とあるが、
(1)　何が毛皮を濡らしたのか。漢字一字で答えよ。
(2)　傍線⑥のようになる理由として適当でないものを、次のうちから一つ選べ。
ア　努めて才能を磨こうとしなかったことへの後悔
イ　虎となり、ただ懼れられるだけで理解されない孤独
ウ　自分に詩の才能がないことへの悲しみ
エ　人間だった時の記憶が薄れていくことへの恐怖

問八　傍線⑦「暁角が哀しげに響き始めた」とは何を示しているか。適当なものを次のうちから選べ。
ア　李徴を捜索する一団が近づいた
イ　夜明けが近づいた
ウ　役人の始業の合図が鳴った
エ　狩人が林中に入ってきた

問九　傍線⑧「俺は既に死んだと彼らに告げて・・・」と言ったのは、李徴のどのような心情があらわされているか。次のうちから適当なものを一つ選べ。
ア　妻に対する怒り　イ　わずかに残った自尊心
ウ　袁傪に対する憐み　エ　詩人になれなかったことへの後悔

問一〇　傍線⑨「慟哭」の(1)読み方を答え、(2)意味として適当なものを次のうちから選べ。
ア　獣が声を上げること　イ　しくしく泣くこと
ウ　声をあげて泣くこと　エ　怒りながら泣くこと

問一一　傍線⑩「まず、このことのほうを先にお願いすべきだったのだ」とあるが、李徴は何よりも何を先にお願いするべきだったと言っているか、説明しなさい。

問一二　空欄 B にあてはまる語として最も適当なものを、次のうちから選べ。

ア　自尊　　イ　主観　　ウ　人間　　エ　自嘲

問一三　傍線⑪「既に白く光を失った月」という表現が示すものとして適当でないものを次のうちから一つ選べ。

ア　李徴の人間としての心が、既に少なくなっていることを示す。

イ　李徴の目的がすべて達成された幸福感を示す。

ウ　夜明け前から始まった二人の会話だったが、時間が経過し、夜が明けたことを示す。

エ　月の光の静けさと李徴の告白を対置することで、運命の冷徹さを表現している。

問一四　次の文章の空欄に適語を入れよ。

この小説『山月記』は【　①人名　　】によって書かれた小説である。小説の舞台は八世紀の唐で、題材となったのは【　　②作品名　　】という文章である。

四

次のカタカナ、ひらがなを漢字に改めなさい。

① 契約をまとめアクシュを交わす。
② 領収書に金イチ万円也と書く。
③ 証拠書類をオウシュウする。
④ 休日が増えてひまをもてあます。
⑤ 役職の辞任をカンコクする。
⑥ お客様を心からカンゲイする。
⑦ ケイゾクすることに意義がある。
⑧ キョガクの借金に苦しむ。
⑨ 干天にめぐみの雨が降る。
⑩ せまい部屋に閉じこもる。

現代文B　学年末考査　解答用紙

①…1点　他は2点

二年　組　番　氏名（　　）

一

問一
a ① しりぞいた
b ① しょうそう
c ① おもむき
d ① おうねん

問二　江南尉

問三　名を虎榜に連ねて

問四
(1) 志を曲げる・諦める
(2) ウ

問五
一つ目　妻子を養うため
二つ目　自分の詩人としての活動に絶望したため

問六　ウ

問七　エ

問八　エ

二

問一
a ① がんらい
b ① 非凡
c ① かんたん
d ① 即席

問二
(1) 人間の心
(2) 獣としての習慣

問三　ウ

問四　イ

問五　人間の心がすっかり消えてしまうこと

問六　かつて自分が作った詩を伝録すること

問七　ウ

問八　イ

問九　ウ

問一〇　異物

問一一
⑩ ① 李徴
⑪ ① 袁傪

問一二　エ

三

問一
a ① 刻苦
b ① 損ない
c ① ひきょう
d ① たいだ
e ① ねんごろ

問二
(1) 臆病な自尊心
(2) 尊大な羞恥心

問三　努めて人との交わりを避けたこと

問四
(1) 才能のある人
(2) イ

問五　ア

問六　ウ

問七
(1) 涙
(2) ウ

問八　イ

問九　イ

問一〇
(1) どうこく
(2) ウ

問一一　自分の詩を伝録することよりも、妻子のことを先にお願いすべきだった。

問一二
① 中島敦
② 人虎伝 ①

問一三　エ

問一四　イ

四

(1) 握手
(2) 壱
(3) 押収
(4) 暇
(5) 勧告
(6) 歓迎
(7) 継続
(8) 巨額
(9) 恵
(10) 狭